

救助講習の事前準備 v1.0（事例想定と救助の流れ及び最低限必要な装備の考察）

20250531 松野メモ

（※ロープワークは実戦で行わないと伝達が難しいので文書説明を省く）

1 よく起こる事故を想定

登山中に岩場等で足を踏み外したことから、滑落に至り、登山者が動けなくなり、セルフレスキューが必要になった。

2 要救助者の怪我の状況を把握し応急措置

① 意識がない場合、出血など怪我をしている箇所はどこか、また、内出血の状況（下組織に血液が貯留し、大きな腫れが見られることがある。この腫れが一気に解かれると急死するので注意）などから、動かすことができるか？

→通常、医師でないと正確な判断ができない。

→判断ができないのにむやみに動かし後々、半身不随になった場合に責任を問われる事例がある。

② 意識があっても、徐々に痛みが激しくなり、苦痛で分からなくなる場合が多い。
（早めに痛み止めを服薬すると良い場合がある）

→まずは状況を冷静に判断し、可能であれば、警察や消防に連絡し、指示に従って行動することが大切。

③ 応急措置をとる（※応急措置は実戦で行わないと伝達が難しいので文書説明を省く）

3 セルフレスキューの対応

（通常、応急措置をした後に動かしても大丈夫な場合に対応する。また、現場でチームレスキューが組めることがないのでセルフレスキュー）

要救助者を危険地帯から脱出し、救助隊のストレッチャー等に載せる安全な場所に移動する。

通常、一人の場合、担いで岩場を登り返すのは体力的に続かないので、担いで救助隊に引き渡せる場所に下す方法をとる。

（通常、軽微な装備では人を背負った空中懸垂は下降速度調整が難しいのでやらずに傾斜懸垂のみ）

4 セルフレスキューの最低限必要な装備（また最低限の装備で可能な方法を検討）

登山は登攀ではないことから装備の違いがある。このことから救助に必要な最低限なものを想定

① 沢登用などの30m×8mmロープ（岩場等ではロープがないと何も対応ができない場合が多い）

② ハーネス（沢用の軽量なもので良い）、ルベルソ、環付きカラビナ（確保、懸垂用）、薄皮手袋

③ カラビナ3枚、180スリング（応用が効くロープスリング）3本（アンカー、懸垂支点用、簡易ハーネス作成等）

- ④フリクションノットで対応する場合があるため、60ナイロンロープスリング（4mm）とカラビナ（登り返しで最低2セット分）

5 その他

用語の呼び方が色々あり世代間で呼び名が違う用語

ブーリン←もやい結び
ガスヒッチ←タイオフ
ハーフヒッチ←止め結び
マッシャー←オートブロック
バッチマン←ヘッドオン
ムンター←半マスト
クローブヒッチ←本マスト
ミュール